

年輪年代学的手法にもとづき接合した平城京出土齋串群

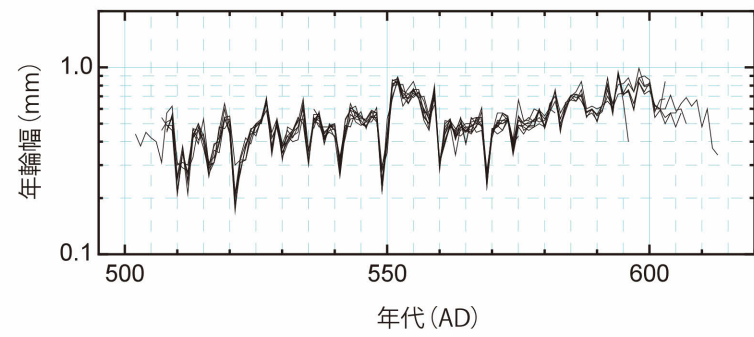
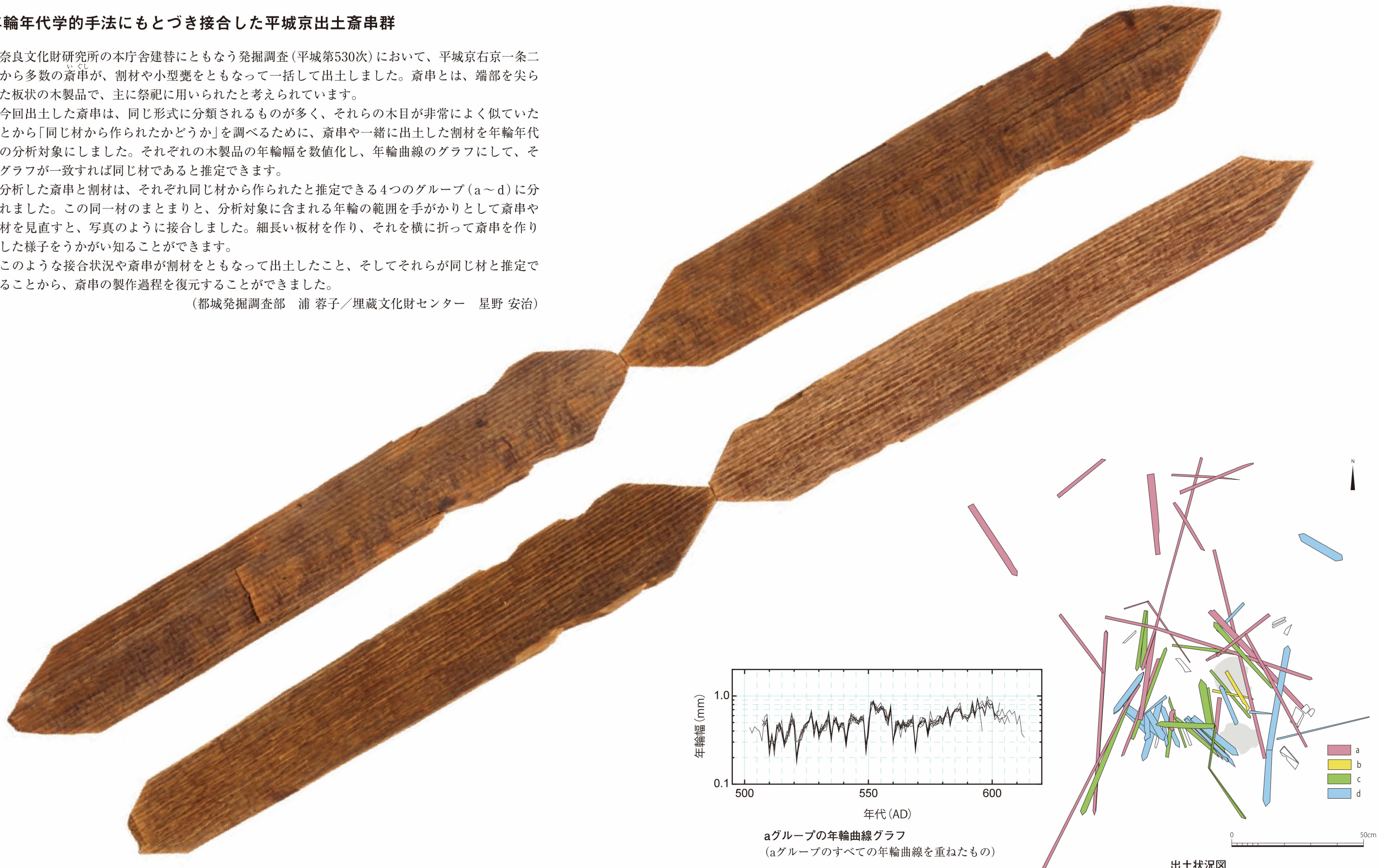
奈良文化財研究所の本庁舎建替にともなう発掘調査(平城第530次)において、平城京右京一条二坊から多数の齋串が、割材や小型甕をともなって一括して出土しました。齋串とは、端部を尖らせた板状の木製品で、主に祭祀に用いられたと考えられています。

今回出土した齋串は、同じ形式に分類されるものが多く、それらの木目が非常によく似ていたことから「同じ材から作られたかどうか」を調べるために、齋串や一緒に出土した割材を年輪年代学の分析対象にしました。それぞれの木製品の年輪幅を数値化し、年輪曲線のグラフにして、そのグラフが一致すれば同じ材であると推定できます。

分析した齋串と割材は、それぞれ同じ材から作られたと推定できる4つのグループ(a~d)に分けられました。この同一材のまとまりと、分析対象に含まれる年輪の範囲を手がかりとして齋串や割材を見直すと、写真のように接合しました。細長い板材を作り、それを横に折って齋串を作り出した様子をうかがい知ることができます。

このような接合状況や齋串が割材をともなって出土したこと、そしてそれらが同じ材と推定できることから、齋串の製作過程を復元することができました。

(都城発掘調査部 浦 蓉子/埋蔵文化財センター 星野 安治)



aグループの年輪曲線グラフ
(aグループのすべての年輪曲線を重ねたもの)

出土状況図

平城京右京一条二坊四坪出土 齋串の接合関係 (実寸大)